

風のたより 3月号

3月に入り、三寒四温の時期となり、少しずつですが暖かくなっていると感じる今日この頃です。約一年振りの執筆となります、入所サービス・生活相談課の山下です。また性懲りもなく、文字が延々と続きますがお付き合い願います。今回もテーマは前回同様“認知症”です。但し今回は、認知症ケアについて、至って普通、当たり前なことなのだけれども、新しく、かつ少し技法チックに語られているものを、取り上げてみました。以前NHKやメディアで多く取り上げられていました“ユマニチュード”という考え方です。

“ユマニチュード”とは、病院や介護施設で起きているケアが困難な状況の解決に40年取り組み続け、思索を巡らせながら現場から生まれた技術をもとに誕生した哲学で、「人間らしさを取り戻す」という意味のフランス語の造語です。この哲学は、ケアを行う際の最も重要な視点に「人とは何か」を考え続けることであると言います。人間にとって「自由であること」「他者に優しくあること」は大切であると多くの人が考えている一方で、家庭や施設、病院等の介護や医療の現場では、ご本人のためと思って一生懸命にやっていることが、結果的に無理やり行う強制的なケアになってしまったり、痛みを伴うケアになってしまったりしています。何かが強制的に行われるとき、そこには自由はありません。ケアによって痛みが引き起こされてしまったり、介護を受ける人が優しさを感じることは困難です。つまり、私たちが「大切だと思っていること」と、「実際にケアの現場で行っていること」が矛盾しているのです。

たとえ、生活に誰かの助けを借りるようになって、「自分が自由な存在であること」「生活に優しさがあふれる状態にすること」を実現するにはどうしたらよいか。ユマニチュードの哲学では、それを先の「人とは何か」に換言すれば、「人は、そこに一緒にいる誰かに“あなたは人である”と認められることにより、人として存在することができる」と定義しています。そして、介護で最も大切なこととして、「相手とよい関係を結ぶ」ことであると。介護者、被介護者ともに自由で、平等、同胞の精神を持つ存在であると考えれば、そこには互いに尊重する気持ちが生まれ、両者の間にはよい関係が結ばれます。介護を通じてよい関係を結ぶことが、介護をするにあたって最も重要なことです。

しかし、「よい関係を結びたい」「優しく介護をしたい」「あなたのことを大切に思っています」と心で思っているだけでは相手に通じません。大切なのは、そう思っていることを相手が理解できる形で表現し、受け取ってもらうことです。優しさを届けるための技術が必要です。加えて「その人が持っている力を奪わない」ことも介護で大切であると述べています。介護をするときには、「何でもして差し上げる」のがよい介護であると考えがちですが、実はそれがその人が本来出来る事を代わりにやってしまうことで、その人の持つ能力を奪ってしまっている可能性があります。またこれは、先に述べた「人として存在すること」とシンクロします。当然、身体能力、体力を大きく奪う結果となり、離床する事が困難になっていきます。

では、優しさを伝えるためにはどうしたらいいのか。ユマニチュードの「優しさを伝える技術」についてのお話については、また次号で詳しく触れていきたいと思えます。

〒807-0801

北九州市八幡西区大字本城 3378 番地の 1

特別養護老人ホーム 風の家

平成 31 年 3 月